

当日のイベントの全録画映像:

<https://vimeo.com/447732901/9fc3d228e8> ※第1部: 25:20 - 1:18:11



被爆 75 年事業／核兵器が存在することは人類にとって何を意味するのか？—コロナ危機の最中に考える—

### 第1部：被爆の記憶を受け継ぎ、未来とへ

【宮本さん】それでは東京のほうから進行させていただきます。長崎の皆さん、よろしくお願ひします。

被爆から 75 年というのは大きな節目だと思っています。恐らく、1945 年、原爆が投下されて、その後、被爆の体験者の方々が、言ってみれば被爆という大変な悲惨な体験を集合的な記憶としてずっとお持ちになって、それを私たちが共有することで、これまで非戦あるいは非核、平和というものに絶対的な価値観を持ってきたのだと思います。ところがその 75 年というのは、本当に被爆体験を直接された方が高齢化をしたり、いらっしゃらなくなったりするということ、それからこの世界が実は 1960 年頃の、例えば冷戦のさなかのキューバ危機を経たり、あるいは冷戦が崩壊したりということがあって、いくつか核兵器を抑えていこうという、あるいは失くしていこうというチャンスがありながら、この 75 年の今、なかなかそれがうまく進んでないということがあると思います。それはやはりこの原爆投下という体験をしたところから、原爆は何をもたらしたのかということの世界に向けて伝えていくということが大事だと思います。

私自身は NHK で長年にわたって戦争体験者を取材して番組を作ってきて、さらにデジタルにそれを出して皆さんで見えていただくという取り組みをしています。Yahoo ニュースでも

「未来に伝える戦争の記憶」というページで長崎の被爆体験の動画、あるいは原爆投下ってどういうものだったのか、原爆資料館を紹介する、そんな動画の配信もしています。それから、長崎新聞社などと一緒に、NHK、ほかの新聞社も入れて、「あちこちのすずさん」という形で戦争体験を未来に継承するキャンペーンのような動きを、メディアを越えて取り組んでいるところです。

今日はまず田上市長から話を聞いてまいりたいと思います。今日の平和記念式典での田上さんの長崎平和宣言、大変印象的でした。なぜ印象的かといいますと、田上さんは大変な危機感を感じてるということをお話をしてくださいました。もう一つ、これは私だけが感じたのかもしれませんが、核軍縮は進まないことに対する苛立ち、これはもしかしたら言葉が過ぎるかもしれませんが、そんなことをお持ちじゃなかったのではないかと思いました。と同時に、それでも課題解決の道はあると。あるいは若い世代への期待といったものがあつたと思います。田上さん、今日の長崎平和宣言に込めた思いをまずお聞かせください。

【田上さん】ありがとうございます。宮本先生が仰ったことは、今年の平和宣言の中には全部含まれていたことだと思います。今年是被爆75年という大きな節目の年です。その75年にふさわしい平和宣言にしたいと思っていました。その意味で、前半では、過去と現在についてお話をしました。被爆のときの惨状のお話から、75年前にそれを受けて国連で核兵器を廃絶するという決議をしたこと、それが今75年経って、核兵器をめぐる状況はどうかいうと、非常に厳しい状況になっていること、そういう核兵器をめぐる75年間について知っていただく部分が前半だったと思います。そして、それを思い出したあとに、後半は未来に向けてのいくつかのキーワードを挙げて、皆さんへのメッセージとさせていただきます。それは、一つは「参加する」というキーワードでしたし、それからもう一つは「相互不信ではなく信頼を」というキーワード、「分断ではなく連帯を」というキーワード、これらはローマ教皇のメッセージの中にもあつたキーワードでもありますけれども、これは核兵器のない世界を目指していく上で非常に大切な言葉だということをお伝えさせていただきました。

平和宣言の中ではいつも共感ということを大事にしていますが、この中のどこかの部分に、お聞きいただいた皆さんが共感をしていただけた部分があつたらいいなと願っています。そして、前半と後半部分にそれをつなぐものとして、体験を語ってくださった被爆者の皆さんへの感謝と敬意を込めて、皆で拍手をするという初めての試みも今年の平和宣言に加えました。田中さんが今、私の隣にいらっしゃいますけども、田中さんもこの平和宣言文の起草委員会のお一人ですが、こういう平和宣言に込めた思いが一人でも多くの皆さんに伝わっていたら嬉しいなというふうに思っています。以上です。

【宮本さん】ありがとうございます。それでは、今お話にもありましたけども、田中重光さんにお話をうかがいます。長崎原爆被災者協議会会長で、ご自身は爆心地から6キロの地点で被爆をされて、その後ご両親は被爆した影響で、特にお父さまが若くして亡くなられて、同時に大変な苦労を田中さん自身がされたというふうにかがってます。田中さんご自身は、これまで書かれたものの中でも、若い被爆者として活動をされてこられたということをお仰っているんですけども、実際には田中さん、まもなく80歳になられるということで、そういったことをふまえて、どんな思いで今日を迎えられたのかについてお聞かせいただけますか。

【田中さん】私は、被爆者のお手伝いをできたらいいなと、そういう軽い気持ちで最初は被爆者活動、その以前は平和活動を国鉄という職場の中でしていました。そういう中で、谷口稜嘩さんや山口仙二さん、そのほか多くの先輩被爆者たちの話を聞き、一緒に色々な活動をする中で、核兵器っていうのは、人類にとっては本当に一番残してはいけないものだということを感じるようになりました。そして、今被爆者の会の会長をしてるわけですけれども、若い人たちが被爆者の話を聞いて、それに基づいて考えて、継承してもらいたい、そのことを一番願っています。核兵器は、人類とは共存できない。被爆者たちが言う、核兵器によって人間らしく死ぬことも、人間らしく生きることもできなかった、そういう残酷な兵器であるということを皆さんに知っていただき、本当にこの核兵器をなくすために、一人一人が考えて行動してほしいなと思っております。

【宮本さん】分かりました。田中さん、また後ほどお話を聞かせてください。続いて、田平由布子さんでよろしいでしょうか。

【田平さん】はい。

【宮本さん】田平さんは、ナガサキ・ユース代表団としてNPTの再検討会議にお出かけになって、第3回の準備委員会の際に国連に赴いて、その場で広く被爆体験であるとか、核兵器廃絶を訴えた経験をお持ちでいらっしゃいます。現在は被爆者の体験、証言を受け止めて、咀嚼をして、そして今度は被爆者の、これは実際はそうかどうかお話を聞かせていただきたいのですが、一人称で、自らが体験したこととして伝えるということに今努力されてるというふうに聞いています。ご自身の体験、それから例えば今日をどんなふうに迎えられるのか、ご自身がやってることを説明いただいてよろしいですか。

【田平さん】はい。私は被爆者の体験や思いをご本人から受け継いで、それを後世に語り続け、被爆体験の継承活動をしております。私が現在受け継いでいる被爆者は2人おりまして、そのうちの1人が吉田勲さんという方、そしてもう1人が山田一美さんという方です。私は3年前から吉田勲さんの被爆体験の継承者として活動させていただいております。実は、吉田勲さんは3年前にお亡くなりになりました。それは私が聞き取りを始めてからちょうど2カ月半後、本当に早い時期でのお別れとなってしまいました。ですので、語り継ぐにあたっての苦労や大変だったことというのはたくさんあるんですけども、勲さんの講話を作って発信していく中で、被爆体験を一人称として語る、自分の中で体験を咀嚼して、8月9日の風景を色々な人に分かっていただくように伝えるというアドバイスを実際にいただいて、それを実践しています。本日は被爆75周年という節目の年に当たって、今、新型コロナウイルスの問題、気候変動問題などいろいろありますけれども、その中で世界が平和の方向に向かっていく、一人一人が平和を実現するために何ができるかを考えるきっかけになるんじゃないかと、そういう希望を持って私は今日この日を過ごしています。

【宮本さん】田平さん、ということは吉田さんの、言ってみれば戦争の、被爆の記憶を対話を通して受け継いだ、あるいはそれ以外に吉田さんの周囲のことであるとか、そういったことも学んだということですかね。

【田平さん】そうですね。勲さんから直接聞かせていただいた話だけではなくて、これまで勲さんが書いた体験記の手記や新聞記事、それから勲さんの知人やご家族による聞き取りなども行って講話を作りました。

【宮本さん】分かりました。また後ほど、それをどうやって広めていくのか、課題等については後ほど伺いたいと思います。よろしくお願いします。

今日はもう一人、若い世代から岩高史織さん、長崎大学の3年生に参加いただきました。ご本人は被爆3世、おじいさまが被爆して、おじいさまはご兄弟を亡くしたということですが、ナガサキ・ユース代表団の8代目でいらっしゃいます。先ほどの田平さんは、2代目でいらっしゃいます。大変残念なことに、この新型コロナウイルスの感染拡大で、赴く予定だったそのNPTの再検討会議そのものが延期になってしまいました。ただ、そんな状況の中でも、本当にどうやって世界に伝えるかということは今懸命に取り組んでいらっしゃると思います。そういったことも含めて岩高さんの思いと取り組みを教えてください。

【岩高さん】はい。私たちがナガサキ・ユース代表団として取り組んだものといましては、私たちが今までやってきた活動の中で、勉強会というものがあるんですけども、その勉強会の中で核兵器廃絶について学んできました。この学んできたものの中で私たちが得たメッセージというものがありまして、そのメッセージを本来であればNPTの会場で伝えるものだったんですけども、それができなくなってしまったので、オンラインで、まずは英語で世界中に発信するというを行いました。

私の平和に対する思いといたしましては、本当に私に関わってくれている全てのみんなのことが本当に大好きで、そのみんなを失いたくないし、奪われたくないと思っております。ですので、過去、核兵器が長崎、広島に使われたことがもう二度と起こらないために、ほんの少しの些細なことでもいいので、私たちが活動していくことで世界の平和の輪につながっていくのではないかなという思いを抱きながら、平和活動を行っております。

【宮本さん】ありがとうございます。今皆さんの活動と今日の思いをお聞かせいただいたのですが、私自身も課題感を持っているのですが、被爆体験を伝える、戦争体験を伝えるという点で最初に節目と申し上げました。それは本当に体験者が少なくなっていく中で、どのようにその体験を伝えるのかということと、もう一つ、例えば田平さんや岩高さんの取り組んでいらっしゃることで、これも同じ世代の中にも広げていく必要があると思うんですね。つまり、単に知りたい人に伝えるだけではなくて、大きな力にするにはみんなで共有したい。そういった意味で、例えば岩高さんはナガサキ・ユースということで、同じ、かなり関心の高いといえますか、問題意識のある方々で活動されてますけども、ほかの同世代の若者はどうでしょうか。長崎で、地元ですから平和教育も自覚的に受けていらっしゃる方も多いと思いますが。

【岩高さん】大学に進学してみると、他県の学生と関わる機会も多くなる中で、原爆の実相であったり、核兵器問題について無関心どころか、その事実さえ知らないという人も結構多くいて、すごくショックを受けたところではあるんですけども、多分、知らないこと自体はその人が悪いわけではなくて、その人が知る環境がただ単になかったのではないかなと

思います。私はたまたま長崎に生まれ育って、そして家族に被爆者もいてという、そういう環境があったので、こういった問題に取り組むきっかけになったのかと思っています。他県の子たちはなかなか歴史の授業以外では触れる機会というものがないという話をよく聞きますので、核兵器問題について気軽に話せるプラットフォームのような場があれば、無関心に関心に変えられるのではないかと私は思っております。

【宮本さん】ありがとうございます。田中さん、よろしいでしょうか。

【田中さん】はい。

【宮本さん】今、若い世代の岩高さんが、長崎はともかく、例えば大学では他県の学生がいて、機会がないのではないかと、何か環境があれば関心が持てるのではないかという話がありました。田中さんも長年、若い人に戦争体験を伝えるということもされたと思うんですが、そのあたりは何か手ごたえがなくなったとか、いやいやそんなことはないとか、ご自身が感じることはありますか。

【田中さん】私もフィールドワークをしたり、また、十数年前から長崎原爆被災者協議会として修学旅行生に話をしておりますけれども、小学生は本当によく聞いてくれます。しかし、年齢が上になるにしたがって、聞き方が変わってくるということが感じられます。また、社会人になると、やはり仕事などがある中で、平和に対しての関心が薄くなってきていると感じます。

私たち被爆者は2016年から、ヒバクシャ国際署名ということで、早く各国に核兵器禁止のための条約を作ってほしいという、そういう願いの署名運動を始めておりますけれども、毎月、月に1回は、長崎のハマクロスという繁華街で約30名ほどが集まって署名活動をしています。その中で、大体平均して280程度の署名が1時間で取れますけれども、若いお母さん、子供を手引いたとか、おんぶしているとか、また抱えている、そういう若いお母さんたちがもう少し関心が持ってくれないかなとつくづく思っています。ですので、やはり平和教育というのは、被爆県とか被爆市だけではなく、やはり日本全国で、日常を平和に暮らすためにはどういったことをすれば平和が保てるのか、また、今1万3,000発ある核兵器をどうしたらなくすことができるのか、ということを考えることだと思います。コロナはやがて収束をしていくかと思っておりますけれども、しかし核兵器が使われた収束ってというのは誰ももう生きていないわけですね。この死んだ人たちを片付けてくれる人もいないと、そういう人類の滅亡を起こす兵器であるわけですね。75年間使われなかったのは本当に幸運だったと思います。何回も使われようとしたわけですけども。だから、人類が存続していくためには、核兵器の廃絶以外にはないと私は思っています。そのためには、本当に平和教育を全国、また全世界で起こしていただきたいと思っております。

【宮本さん】ありがとうございます。田平さん、先ほど田平さんは、吉田さんと山田さんという方の体験を引き継ぐ形で、それを一人称でお伝えすると仰いました。実際に直接体験者じゃない田平さんの話をどんなふうに見て止めていますか。あるいは、受け止め方に何か課題等がありますでしょうか。

【田平さん】それは講話を聞いてくださってくれた方の受け止め方ということによろしいですか。

【宮本さん】そうですね。

【田平さん】ありがとうございます。実際に今まで5,000人を超える方々に講話をさせていただきました。下は小学生から上は一般の大人の方々にさせていただいたのですけれども、講話に対する反応というのは、自分が思った以上に良かったです。というのも、やはり私がこの継承活動を始める前までは、被爆者の言葉じゃなければ説得力がないだろうと、体験していない人がいくら受け継いだところだという思いが正直あったんですけれども、実際にやってみて、やはり自分の努力や工夫に応じて聴衆の方々の反応や気持ちまでも変えられるなということが実感としてあります。それは具体的に感想文の中にもありました。例えば、講話を聞いてくださった中学2年生の子なんかは、「講話を聞いたことで長崎に修学旅行に行く意味がやっと分かりました」とか、あるいは「田平さんが吉田さんを伝承しているように、私も次につなげていく人になりたい。そして人のために命を使える人になりたい」というような講話の感想だけでなく、自分はこうなりたいという思いも含めて仰ってくださる方が多いので、そこは本当に嬉しかったですし、体験がない人でも、また、若い人でも被爆体験を継承することは十分に可能なんだなと思いました。

【宮本さん】すばらしいですね。田平さんの講話がちょっと背中を押したり、行動につながることもあるということですね。

【田平さん】そうですね、そうであることを願っています。

【宮本さん】田上市長にお話を聞きたいと思います。今3人の方々のお話を聞いていただいたと思うんですけれども、問題意識としては平和教育ってのが大きなキーワードだと思います。もう一つは、できるだけ機会を増やす、あるいは長崎だけでなく広く。このあたり、市長としてはどんなふうにお考えでいらっしゃいますか。

【田上さん】平和教育については、長崎でも数年前に少し方針を変えたんですね。それは、これまで被爆者の方から体験を聞くということがイコール平和教育というふうにとらえられているところもあって、実際にはお話を聞く機会を作ることだんだん難しくなっているという状況もあるわけですが、一方で子どもたちはこれから大人になると、海外に行って仕事をしたり、あるいは外国の人たちと一緒に仕事をしたりするケースが増えてくる。そういう意味では、そういう異なる考え方、異なる文化の皆さんと共生していくこと、それは平和につながる道で、そういう異なる考え方の人たちと共生していく方法を学ぶ、平和を作る人になるということ平和教育の中で取り上げていこうというような形の平和教育を今スタートさせています。子どもたち自身が自分たちで、平和ってなんだろう、平和をつくるにはどうしたらいいんだろうということを考えていくような平和教育ですね。受け身でない平和教育を今実践が始まっています。その中で、被爆者の方のお話を聞くときにも、これまではお話を聞くだけだったのが、子どもたちから被爆者の方に質問をしたりして、そこでやりとりが生まれるようになってきているというような変化があります。この平和教

育は非常に長崎や広島の特長なことではなくて、軍縮・不拡散教育という分野もありますけども、これからもっと一般的になっていく、日本全体で取り組んでいくべきテーマだと思いますし、それから日本政府もそういう意味では軍縮・不拡散教育に力を入れるというふうに仰っていますので、そういうところと連携しながら広めていくことが必要だと思っています。

それからもう一つ、先ほど岩高さんや田平さんのお話などを聞いてても、色々な活動をしてきている若い人たちがいるということを感じるわけですけども、実は彼女たちの親の世代だったり、私はその親の世代よりももうちょっと上の世代ですけど、私たちの世代こそが、むしろそういう平和のための活動などをあまりやってこなかった世代ではないかなと反省をしています。そういう意味では、だんだんそういう色が薄れてきたというよりも、むしろ今の若い人たちの中に関心を持ったり、活動を始めたたりしている人はむしろ増えているんじゃないかと実感しています。それはとても大切なことで、一方で、今回新型コロナウイルスが世界中に感染していく中で、改めて命の大切さ、あるいは環境の大切さといったものに対する関心が世界的には強くなっていると思いますし、この流れの中で若い人がもっとそういったことを、例えば仕事にしたり、取り組みをする人は増えてくるのではないかなというふうに思っています。むしろその上の世代、私たちの世代が経済中心に回って、ほかの価値について少し目が向かなかった世代がいますが、今の若い世代は、もっと色々なことに目を向ける人たちが多くなっているのではないかと、それは平和に近くなっているということでもあるかもしれないし、私はむしろ悲観的ではなく、非常に大きな希望を持って今の若い人たちを見ています。

【宮本さん】私も市長と大体世代が近いので、確かに仰る通りだなと。もしかしたら我々が今度若い人から刺激を受けて、若い人が我々とは違う視点で目を向けている中で、我々は何ができるのか。我々というのは中年以上の世代ですけども、言ってみれば第二世代ですね、戦争を体験した方の。見守るだけではなくて、自分たちで考えていくということに、今感じました。ありがとうございます。

【田上さん】若い方は新しい道具を使うこともすごく得意なので、今うまくいくやり方は、若い皆さんがこんなやり方でやってみたいっていうときに、少し足りない部分を上の世代が応援したりして補ったりすると、すごく新しい活動が生まれていきやすくなるのではないかなとも感じています。応援者になるということですね。

【宮本さん】そうですね。では田中さん、今市長からも、上の世代が応援者になっていくというお話がありました。田中さんとしては、例えば田平さん、岩高さんに期待することは何でしょう。

【田中さん】長崎では若い人たちが活動の場を広げていっていますけれども、まだまだ数としては限られていると思います。これを、ご飯を食べるように、水を飲むように、それほど普通なこととして、皆さんが平和活動を考えてくれるようなことになっていったらいいのではないかと感じています。

【宮本さん】私たちの暮らしの中に平和を考えるとということ、あるいは平和教育というもの

が暮らしの中にそのまま一つとしてあるということですね。

【田中さん】そうですね。やはり家族揃って本当に笑いながら食事をするというのが平和だと思います。これが戦争になると、一瞬にして吹き飛んでいってしまうし、音楽を聴くこともできないし、映画を見ることもできない。今そういったことが自由にできるというのは、平和な社会を私たちが享受しているということじゃないでしょうか。

【宮本さん】ありがとうございます。田平さんとしては、今やられている被爆体験の継承をして自ら伝える、これはどんなふうに今後広げていきたいとお思いですか。

【田平さん】私自身は、本当は今年、全国で講話をしたいと思っていたのですが、新型コロナウイルスの中でできなくなってしまいましたし、今学校現場も混乱して、とても依頼をするような状況ではなくなったと思うので、こちらが行けないのだったらオンラインで講話をしたいなのも考えています。そして、私は吉田勲さんの講話については、昨年英語版の講話を作りましたので、これからは英語で世界に、あらゆる国のあらゆる階層の人々に被爆体験を伝えていくということにも挑戦をしていきたいと思っています。そして、核兵器廃絶の活動をやっている、やっていないに関わらず、色々な人とのつながりを増やして、ともに平和のために行動できるたくさん仲間を作っていきたいと思っています。

【宮本さん】ありがとうございます。今、田平さんから英語での講話を作って、その動画をオンラインで配信するという取り組みについてお話がありました。岩高さんも問題意識としては、とにかく世界に伝えていきたいということがあるかと思うんですけども、何か今考えてることはございますか。

【岩高さん】私たちが活動をしていく中で、海外の方と交流する機会も増えましたので、そういった方々と今後も、私の活動任期は8月で終わってしまうんですけども、今後も平和活動について積極的にネットワークを強くしていければいいのかなと思っています。まだ明確にこれをやりたいとか、こういうことがしたいというものが私自身にまだないのですけれども、継続してやっていけたらいいなと今考えております。

【宮本さん】分かりました、ありがとうございます。もうちょっと皆さんからそれぞれお話を聞きたいところなんですけれども、質問がかなり来ていますので、その質問にお答えいただきながら皆さんのお話を聞かせていただきたいと思います。

田上市長にお答えいただければと思いますが、現在の新型コロナウイルスのパンデミックが核兵器、軍拡、軍縮に及ぶ影響に対して何かお考えでしょうか、という質問が来ていますが何かございますでしょうか。

【田上さん】一つは、先ほどお話した、社会的な関心が命、あるいは環境といったものに向かっていく方向性がますます強くなるということがあります。そして、そのことが及ぼす影響で、例えば核兵器のような非常にお金がかかる、作るのにも維持するのにもお金がかかるものに、たくさんつぎ込んでいくのかっていう考え方、それよりも命を守る方向にお金を



使ったほうがいいんじゃないかっていう、政府のお金の使い方にも色々な意見が出てくる。それはすごく説得力があって、国レベルだけではなくて、一般市民の方たち、市民社会の人たちにも説得力のある、「そうだよな」というふうに思ってもらえる方向ではないかと。そういう方向にいろいろ進むことは、核兵器の廃絶、核兵器、核軍縮の方向に進んでいく方向でもあると思っています。そういう意味では、ポストコロナ、アフターコロナと言われますけども、この時代に核兵器の問題を一緒に考えていくということはすごく大事なことだと思います。よくコロナに関しては「ウィズコロナ」の段階に入っている、ウィズコロナで行くしかないと言われますけども、コロナに関してはウィズコロナはあり得る、選択肢としてやむを得ないところがあるのかもしれないですが、ウィズ核兵器はないということもしっかりと伝えていく必要があると思っています。

【宮本さん】ありがとうございます。海外からの質問でも同様のものがありまして、核兵器は平和維持のために欠かせないという人たち、いわゆる安全保障との関係だと思えますが、相対化させて物事を考えているということがあります。こうした、核兵器が抑止力になるのだということに対するシンプルな答えはありますかという質問が海外から来ました。いかがでしょうか。

【田上さん】これについては、先ほど、このシンポジウムの冒頭であった ICRC が作った映像が端的に示していると思います。核兵器が使われる危険性というのはどんどん高まっている。誤作動であったり、誤った情報によって誤った判断につながったり、あるいはリーダーの意図的な判断で核兵器が使われたりという危険性はより高まっているということが一つあります。それから、抑止力についても、実際に抑止力と言っている間にそれを持つ国が増えていっているという現状が実際にあります。その中でテロ組織等に渡ったりという危険性も増えています。ですから、抑止力と言いながら、たまたまこれまで核戦争が起きずに済んだということだけであって、抑止力と言い続けている中で状況がどんどん悪くなっていっているのは、すでに現実を見れば分かることだと思います。

【宮本さん】ありがとうございます。次に質問させていただこうと思うのが、新型コロナウイルスの関係もありまして、田平さんはオンラインでご自身の講話をご覧いただいているというお話がありました。そのオンラインについて、私自身も取り組んでることなんですけども、デジタルの力を使って、デジタルアーカイブであるとか、あるいはインターネットで被爆者の声を保存して伝えることについては、オンラインになった途端に次世代の心に響くのかどうかということに対して懸念を抱いてる方がいらっしゃるんですね。このあたり、どうでしょうか。本来は直接声を、あるいは本当に相対してお言葉を聞くのがいいという、それは確かにあると思うんですけども、オンラインについては田平さん、どんなふうにお考えですか。

【田平さん】私自身も全く同じ懸念を抱いています。このように自由に移動ができないというときにはオンラインがベストな方法であると思っていますが、一方で、やはり人間関係を作る点でも、話を聞くというときの一番の基本はやはり対面だと思います。まずはオンラインでもいいので、デジタルのツールでもいいので、それを活用して知ってもらおうということが一つ、そしてやはりそれだけに留まらずに、いつか、例えば長崎に行こう、広島を訪れて

みようと思ってもらえるような工夫をすることも大事だと思います。オンラインに終わらせないという工夫も私たちには求められるのかなと思います。

【宮本さん】一方で、オンラインになることによって、かなり遠くへ、あるいは世界に届きますよね。この辺りは、岩高さんに聞きましょうか。岩高さんも若い世代なので、そういうデバイスとかツールを使うということに対しては、抵抗感はないんじゃないかと想像するんですけども、オンラインになることによって世界の、例えば若者をつながるとか、そのあたりは実際にやったことがある、あるいは可能性があるというふうに感じてますか。

【岩高さん】はい、私は可能性を感じています。コロナになったことによって、私たちの活動がほぼ全てオンラインになったと言っても過言ではないんですけども、やはりオンラインになったからこそ、世界中どこにいても、本当に自分の家でも世界中の人たちと簡単につながることができるということを身をもって体験しました。これから継承というものが課題となっていくと思いますが、やはり新しい継承の形がオンラインでも、工夫次第では可能になっていくんじゃないかと私は思っております。

【宮本さん】ありがとうございます。私自身も、最初に申し上げたように、インターネットを使って体験者の映像・言葉をアーカイブしてご覧いただく試みをやってるんですけど、もしかしたら、例えば田平さんとか岩高さんの試みと、インターネット上の証言等は、いわば素材として使うとか、あるいは今ですと本当に体験者の言葉が直接お聞かせして、でも一方でインターネットにつないで、一つの場で体験者の言葉、あるいは田平さんのように次世代の方のお言葉とネット上の証言の動画とをうまく組み合わせていくということに可能性があるのかなと私自身は思っています。

田中さんご自身はどうでしょう。ご自分で今体験を伝える活動もされていると思いますが、動画として収録して、それをまた活用していただくということについて、あるいはインターネットを活用いただくということについて、田中さんはどのようにお感じになっていますか。

【田中さん】継承の仕方はいろいろあると思います。その中で、これからやはりオンラインやビデオを撮って、それを動画として流していくということは大いに広げていっていただきたい。やがて被爆者はいなくなる。あともう5年もすると、被爆体験を話せる被爆者がどれだけおるかと言ったら、もう本当にわずかなものだと私は思っていますので、色々な形で継承するためのことを考えてやってほしいなと思っています。

【宮本さん】そうしますと、田平さん、岩高さんはじめ、何かこれから一緒にできることを僕も考えたいと思います。プログラムを作るとか、こういう仕組みなら伝わるんじゃないかというのは皆さんとやっていけたらなと思います。

次、少し質問を変えます。核兵器禁止条約はあと7カ国で発効するということになります。先ほど教育の話をしたのですが、批准した国々で、長崎でずっと積み上げてきた平和教育、あるいは市長が仰っていた、今この時代、こういう形で平和教育できるんじゃないかという、新しいものを模索してるということなのですが、うまくその国々に合わせた形でやっていただく、そういったことを進めるのはどうでしょうかという、海外からのご提案です。市長、

いかがでしょうか。

【田上さん】素晴らしいご提案だと思います。実は平和首長会議も一つのチームとしてずっと活動していたのですが、今はブロック別の活動ができるようなシステムに変えています。それはどうしてかという、加盟都市数が増えていったときに、それぞれの地域によって状況が違うということが分かってきました。例えば、私も南米に行ってお話をした際、あなたは長崎から来て核兵器のお話を私たちにしてくれたけども、実は私たちにとってはもっと小さな兵器が問題なんだと。それは具体的に言うと銃なんだと。そして年間3万人以上の人々が銃で亡くなっていると。あなたの街で原爆で亡くなった人の半分近くが1年間の間に銃で亡くなるんだというお話をされました。そういう地域では、銃について当該地域の都市が連携して取り組むということがあっていいのではないかとということで、地域ごとにテーマを設けて活動をしています。同時に、日本の都市でも同様に、その街にとって戦争体験が違ってきます。その街の人の中に体験した人がいたら、その人からお話を聞く、そうするとあの場所でそんなことがあったんだというふうに、長崎や広島の話聞くよりもむしろ身近に感じるのではないかと思います。そこから始まって、そして広島や長崎のことを聞いてもらって、戦争のことを考えるという形で入っていくと、より自然に入っていくという意味でも、世界の中の色々な体験を、まず自分の街、自分の国の体験を話すところから始まるというのはとても自然で、よく理解できる方法だと思います。先ほどの提案のような取り組みをこれから増やしていくことはとても大事だと思います。

【宮本さん】ありがとうございます。今教育といいますと、国内では修学旅行で広島と平和記念資料館、それから長崎の原爆資料館に行って学ぶというのが、今は新型コロナウイルスの関連でなかなか実施できないという状況がありますが、これは（一般的にも）減っているのではないかと感じられている方々がいます。今日この場に資料館の方がいらっしゃるわけではないんですが、何かお感じになってることはありますか。田平さん、長崎の場合はそうでもないでしょうか。

【田平さん】こういう話を聞く機会が減っているということですか。

【宮本さん】訪ねる人そのものが減っているという。私自身は沖縄戦を専門領域にしているので、例えばひめゆり平和資料館でいうと、明らかにこのところ減っているという数字が出ています。このあたりは広島、長崎、特に長崎はどうですか。減っているとか、そういう状況はお感じになりますか。

【田平さん】そうですね。実際に原爆資料館も、そして隣にある追悼平和記念館というところも、来館者の方はすごく減ったなという印象を受けますね。長崎に修学旅行に来てくださる県外の方とか、長崎で平和教育をする予定だった方もすごく減ったというニュースも実際耳にしたことがあります。

【宮本さん】これは、何かやりようがありますかね。市長にお伺いします。全体に、戦争と平和を考える資料館そのものが実は維持できないという全国的な問題があったり、あるいは長崎の場合も少し減っているのではないかと状況、いかがでしょうか。

【田上さん】極端に減っているということはないと思います。傾向としては、子どもたちの数が減っているということ、修学旅行も少しずつ減っていることはありますが、長崎に来る修学旅行の皆さんは、やはり平和教育は基本の分野として学ばれる人が多いというふうに思いますし、傾向でいうと外国人の方たちが増えているという部分もあります。それはおそらく広島も同じだと思いますけども、総体として減っているということはないですが、中身が少しずつ変わってきているということはあると思います。そして、数を増やすよりも、核兵器の問題等に関して関心がある人たちを増やしていくことで、自然に原爆資料館等の入館者も増えていくと思います。数を増やすことが目的ではなく、やはり関心を持つ機会をいろいろ作ると、長崎に行ったときにはやはり寄ってみようという方も増えてくるのではないかと思います。また、クルーズ船などで見えた中国の方なども原爆資料館に来るケースはけっこう多かったですし、そういう皆さんに見ていただくということもすごく大事なことだと思っていますので、色々なチャンスを増やししながら、長崎においでになったときには原爆資料館に来ていただく、あるいは原爆資料館を見たいので長崎、広島に行くという人たちを、関心を増やしていくことでカバーできる分野はあるのではないかと思います。

【宮本さん】そうですね。私も去年はかなり時間をかけて撮影をさせていただいて、長崎原爆資料館を紹介する映像コンテンツを制作したのですが、実は本当、市長の仰るように、あの原爆で何が起きたのかと同時に、核兵器廃絶に向けての動きを有機的にうまく結びつけて展示されていますよね。だから、あそこは拠点ですかね。

【田上さん】そうですね。今、原爆資料館自体はオンラインで展示物を紹介するような番組を作ってくれる皆さんも増えており、色々な形で伝えることはできると思いますが、やはり宮本先生が仰ったように、拠点としての原爆資料館の意味も大きいと思います。そういう意味では、これまでの原爆資料館のコンセプト、そこに何か被爆の痕跡を残すものがあって、そこで伝えていくってということだけではなくて、そこを拠点にオンラインで世界に伝えていくっていうあり方など、色々な原爆資料館のコンセプトや意味づけもこれからの時代に合わせて変えていく必要があるのではないかと思います。若い世代の皆さんと色々なアイデアを出しながら探っていく、新しい原爆資料館のあり方というのが見つかっていく、それも次の25年間の一つのテーマではないかと思います。

【宮本さん】市長、どうもありがとうございました。これで時間になってしまいました。皆さんどうもありがとうございました。田上富久市長、田中重光さん、田平由布子さん、それから岩高史織さん、どうもありがとうございました。本当に皆さん、戦争体験を伝えるという意味でいうと大変ヒントになるお話、ご自分の体験からお話をしてくださいました。被爆体験をされた方が高齢化して少なくなっている中で、そのことを引き継いで自らの言葉で伝える営み、それから、オンラインツールを使って積極的に海外にも伝えることに意欲を燃やしている岩高さんのお話。それから、市長からも平和教育、新しい取り組みが始まっているということ、あるいは海外での、平和教育についてのお話もしていただき、大変参考になりました。

最後に私の方から申し上げますと、私の経験からすると、皆さんがやっていることを、オンラ

インも含めて、体験者の方の言葉を直接聞くという取り組み、それから次世代の方の取り組みを合わせて、ハイブリッドな形でうまくデバイスやツールを使って伝える。それも国内だけでなく、世界に伝える。そんなときに、岩高さんのような若い方がそこに入ってくる。市長も仰っていましたが、市長の世代、私の世代、あるいは田中さんの世代も含めて、その世代が一緒になって世界に被爆の体験、核廃絶を伝えるという、そういうハイブリッドな取り組みを作っていきたいと思った次第です。皆さん、どうもありがとうございました。

---